ISSN 1342-3932

Nagoya University Archives News

名古屋大学史資料室ニュース

第2号

目次

禁煙と日記 …… 2

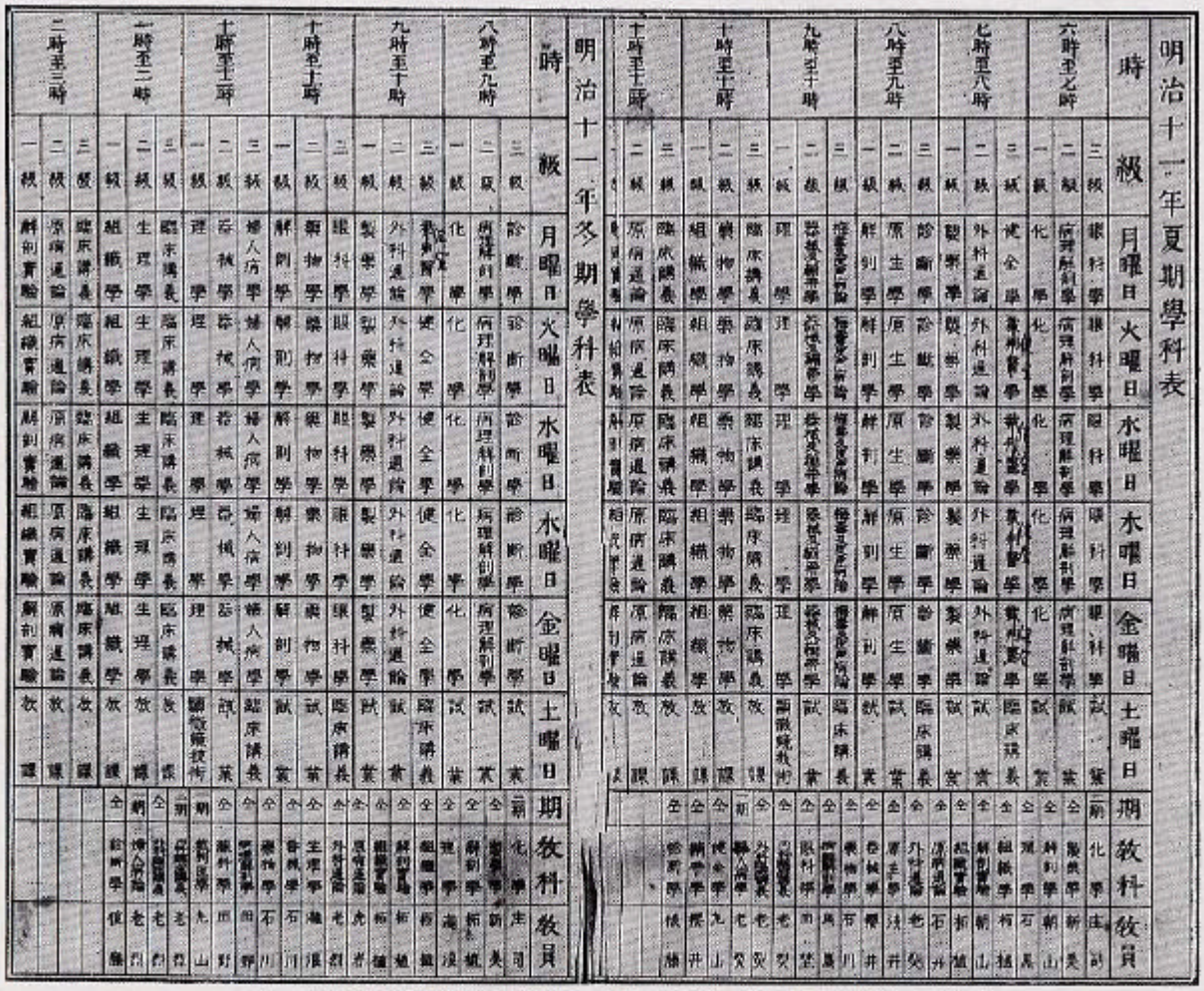
名古屋大学史開講の意義 …… 3

「名古屋大学史資料室利用規程」（仮称）
制定に向けての取り組み …… 5

受贈図書一覧 …… 6

紀要原稿募集 …… 7

資料室日誌（抄） …… 8



1878年の公立医学校授業時間割表（『愛知県公立病院及医学校第一報告』）

禁煙と日記

名古屋大学総長　加　藤　延　夫

長続きしない、あるいは長続きさせることのできないものの双璧は禁煙と日記ではないかと思う。

私事になるが、禁煙については昭和45年1月1日以来続いている。私たちの医学部卒業のころはインターン（医学実地修練）の制度があり、インターンの1年後医師国家試験があった。インターン時代から少しづつタバコを吸うようになり、医者になってから本格的に吸い始め、次第にヘビースモーカーになった。昭和42年と43年のおよそ2年間ドイツのギーセンという小都市の大学に留学したが、家主のおばさんから「部屋の壁紙やカーテンに色がついて困る」と、笑顔ながら苦情を再々言われるほどだった。

ドイツ滞在中に医学部紛争が起きた。そのため、名古屋大学医学部の細菌学の教育責任者が不在となり、昭和43年10月、急ぎ帰国を要請された。帰国してみると、およそ2年ぶりの医学部のあまりの変りように大きな衝撃をおぼえた。当時、私は愛知学院大学歯学部微生物学助教授であったが、名古屋大学医学部では非常勤講師の身分のまま細菌学の講義・実習を担当した。年が明けて昭和43年を迎えても、医学部紛争は依然として尾を引き、また学生による校舎の封鎖騒ぎも新しく発生したりした。医学部正常化のために何とかしなければとの思いがほとんど極限にまで高まったが、非常勤講師の立場では如何ともすることができなかった。その年の大晦日の夜、来年こそ医学部正常化と改革の実現の年であることを祈った。そのために、自己改革から始めよう、そのために何をなすべきかを自問した結果、先ずは禁煙から始めようと思い立った。それが午後11半ごろで、急いで手許にあった数箱のタバコをおよそ30分で全部吸い、昭和45年1月1日午前0時を期してタバコを断った。禁断症状なのか、めまいともうろう状態の数日が夢のように過ぎると、鮮やかな日が訪れた。以来、タバコの煙をうとましく思いこそすれ、恋しく思うことは全くない。

一方、日記については語る資格はない。小学生のころ、夏休みや冬休みの宿題に日記が課せられたときは仕方なく毎日書いたが、休みが終わると日記を書く習慣も終わってしまった。

昭和19～20年、中学（旧制）3、4年生のとき、戦争が激化し、学徒勤労動員で名古屋市の市電の車掌として勤務したが、そのころの日記が書いてあればよかったなといつも後悔の思いがうずく。名古屋市は日本の都市のなかで最も激しくアメリカ空軍の空襲を受けた。当時、市電は名古屋市街地だけでなく、名古屋港周辺の埋立地につくられた軍需工場に人を運ぶため、多くの路線が網の目のように走っていた。乗務中、空襲警報が鳴り、防空壕に避難したとき、近くの工場が爆撃されたことも何度もあった。何人かの友達が直撃弾の犠牲になった。現在の平和な日本では想像もできないような、こうした日々をどんな思いで過ごしたのか、今となっては芒洋とした過去の思い出に頼る以外知るすべがない。

太平洋戦争終結50周年にあたる1昨年（平成7年）8月、「グリコ日記―僕の見た太平洋戦争―」（小島吉孝著、学生社）が刊行された。私自身はこの本の存在を知らなかったが、中学時代の同級生が「ぜひ読んでみろ」と言って送ってくれた。著者は私と同年輩で、名古屋市の小学校、中学校を経て、名古屋経済専門学校（旧制）を卒業された方である。この本の内容は小学校6年生から旧制中学4年までの5年間の日記である。表題の「グリコ日記」の由来は、戦前、子供たちに好まれたグリコの引換賞品の日記帳の名称である。この日記帳は一般書店でも発売され、当時、博文館の日記帳とともに少年たちに愛用されたという。中学校が違うので勤労動員の場所や仕事の内容が異るが、この日記を読み進むと自分自身の記憶が次々と呼び覚まされて、往時に返ったような気がしてきた。

総長就任後しばらくして、昭和42年に発生した医学部紛争と紛争処理に、大学評議会、医学部教授会、医学部五者協議会などいろいろな立場からかかわった方々と会う機会があった。これらの方々は皆、当時の紛争関連資料を注意深く保管しておられ、これらの資料を今後どのように整理し、保管するかが共通の関心事であった。できるならば、大学の然るべきところで保管できないであろうかというのが集りの趣旨であった。結論としては、そのときは計画中であった名古屋大学史資料室が設置されたら、そこが保管場所としては最適であろうということになった。

このときの圧巻は、出席者の一人であった井上俊名誉教授（元名古屋大学医学部衛生学教授）が一日たりとも欠かすことなく書かれている日記の存在であった。井上

↗

名古屋大学史開講の意義
—「自由闊達で清新な学風」の継承を—

名古屋大学史資料委員会副委員長
河　野　恭　廣

名古屋大学五十年通史（全2巻）が刊行されたのは、平成7年10月である。私が名古屋大学史編集委員会に加わったのは平成4年4月であるから、この刊行に副委員長として3年ほど関わった計算となる。しかし、集まってきた通史と名古屋大学史紀要の原稿などの査読くらいで、実質的な仕事は篠田委員長、三鬼副委員長と室員の面々に負ぶさった3年であった。このことは、平成8年4月に編集委員会が名古屋大学史資料委員会へ組織替えになってからも変わりがなく、平穏にこの3月末の停年を迎えることができると考えていた。ところが、大学史資料委員会のいわば卒業要件に相当する本稿の執筆を求められてしまった。

名古屋大学五十年史通史（二）に収録され、創立50周年記念祝賀会の祝辞で西島京都大学学長も触れられた名古屋大学平和憲章は、制定されてから今年の2月で10周年を迎えた。私は、憲章起草委員会の唯一人の在職委員と言うことで、昨年の夏に平和憲章について学生を対象にした話の依頼を受けた。世話役の学生と話の内容に関する事前打ち合わせの際、学生からは憲章の原点は何か、社会のなかでの憲章の精神の生かし方、学生生活や就職後の生活における憲章との関わり、学生への期待など様々な要望がだされた。私はそれらをふまえて話の準備を進める過程で、名古屋大学の組合や学生自治会活動の特徴、さらには名古屋大学の学風について触れなければ、憲章のもつ意義を学生に理解してもらうことができないのではないかと考え、名古屋大学五十年史通史（全2巻）を活用させて頂いた。

とくに、通史（二）の「大学管理法案と大学自治」（第三編　第一章　第二節）、「レッド・パージ問題への対応」（同　第七節）、「伊勢湾台風をめぐる動向」（同　第二章第七節）、「日米安全保障条約改定反対運動」（同　第八節）、「大学紛争」（同　第九節）、「名古屋大学平和憲章の制定」（同　第一節　五）を中心に組み立ててみた。主観的ではあるが学生は、教養部学生自治会等が中心に多数の学生が参加した伊勢湾台風被災者の救済活動と、日米安全保障条約改定反対運動に関心を持ったように思う。両者は、時期的に重なったため、学生たちが「安保か、救援か」の選択をめぐって真剣な議論を展開しながら救援活動を

先生は戦前、戦中、戦後を通じて毎日日記をつけておられるという。いつの日にか「医学部紛争史」なるものをつくるときが訪れることもあろう。そのとき、「井上日記」はいろいろな出来事や資料の時期の確定や資料間の間隙の不明の事項の解明などに大きな役割を発揮するに違いない。

前身校の歴史を含めて、名古屋大学の歴史上最も不可解にして不可思議な出来事が昭和6年5月1日に発生した。その日は、愛知県立の愛知医科大学から官立名古屋医科大学に移管した日であった。この日、愛知医科大学からの教授8名が名古屋医科大学教授に発令されなかったのである。この8名は、官立医大には通常無い胃腸科と歯科のほか、解剖学の2名、生理学、病理学、精神科、耳鼻科の教授であった。再任されない講座の後任教授としては東京帝国大学医学部関係者が任命されることになった。再任されなかった解剖学の2名の教授と精神科の教授が愛知医専出身者であったために「学閥人事」であるとの不満が助手や若手教室員の間に沸騰した。急きょ、助手団が結成され、学長室前でのハンガー・ストライキや附属医院での診療拒否などの強硬手段に訴えたため学内は大いに紛糾した。この紛争は、藤井学長が昭和7年1月辞任することで収拾に向かった。紛糾の発火点となった8名の教授不再任は果たして「学閥人事」であったのか。8名のうち3名は愛知医専出身者であったが、他の5名は東京帝大医学部あるいは同専科出身であった。また、再任された20名近い教授の中に愛知医専出身者も含まれていた。この不可解かつ不可思議な出来事の真の理由を解明するに足る資料は今までのところ見つかっていない。

官立名古屋医科大学発足時の教授発令関連の資料が文部省に残っているだろうか。そのころの大学幹部のなかに井上俊名誉教授のような方がおられ、教授会での議論や文部省の意向などの事柄を日記につけておられ、しかもそれが戦災を免れて残るというような奇跡が幾重にも重なっていない限り、大学側には事件解明に有用な資料は出てこないと思われる。

いずれにせよ、継続された日記は自分史の資料以上の価値を持つものであろう。総長任期6年のうち5年を終えようとする今日このごろ、5年間の日記をつけなかったわが身を責めている。

行い、救援活動のなかで被災者の憤りに共感しつつ学生たちが政治的・社会的意識を深め、そしてその力を安保反対運動に向けた、と言う先輩たちの運動の経緯が大学史に記述されていることを初めて知って、学生たちは興味を感じたのであろうか。

こんな体験から、私は「名古屋大学史」を、たとえば共通基礎科目の一つとして開講すべきではないかと考えている。マスコミなどは、今の多くの大学生は、大学を就職のために止むを得ず通過しなければならないところとしてしか捉えていないと言う。学生の没個性、あるいは平均化などを嘆く声が大学関係者からも聞こえてくる。私は、学生のなかのマスクされた形質を発現させるのが大学の責務であると考えている。その一つの方法は、先ず自分の学ぶ大学の歴史—学風—を知る機会の学生への提供であろう。広辞苑によれば、学風とは「学問上の傾向。学校の気風。校風」とあり、ちなみに平和憲章では名古屋大学の学風を「自由闊達で清新な学風」と表現している。

昭和60年11月に決定された名古屋大学史全巻の編集方針の一つに、「前史および帝国大学期、さらに新制大学期を通じて、名古屋大学が人材の育成および学術の発達において果たした役割について、一つには国家政策との関わりから、他方、地域（東海地方さらには中部地方）の本学に対する要求・期待との関わりから叙述する」がある。この方針で編纂された名古屋大学五十年史通史（全2巻）は、最適の教科書ではなかろうか。

また、篠田弘現名古屋大学史資料室長が通史の編集後記で、「平成三（1991）年七月に大学設置基準が大綱化されたことにともなって、大学の自己点検・自己評価が社会的に強く要請される時代となった。この自己点検・自己評価においては、大学における学問研究・教育活動の実績をより客観的な形で表現することが求められる。その実績の積み重ねを正確に示すために重要な根拠となり得るものが、大学史資料であろう。」と、大学史資料の意義について述べられている。このような価値をもつ大学史資料を、積極的に大学教育に活用する方途が講じられてもよいのではなかろうか。

その意味で、大学史資料を利用し、それ自体が大学史資料となる自己点検・自己評価報告書の多くは、その目を学外社会に向け、社会の多様な価値観を大学に反映する新入生の存在に、あまり目を向けてはいないように思われる。私は、新入生にも自己点検・自己評価の結果を示し、ともに大学の学問研究・教育活動の充実と発展を図るべきではないかと考えている。まさに名古屋大学の学風は、このようにして50年有余の時間軸上で、多くの優れた先達と学生がともに築いてきた歴史の所産ではないだろうか。この学風を次代へ継承し、発展させるために、大学史の開講などを通じて名古屋大学が具体的に挑戦する時期に来ていると思う。

（農学部教授）

「名古屋大学史資料室利用規程」（仮称）制定に向けての取り組み

ワーキング・グループの設置

現在、名古屋大学史資料室が所蔵・保管する資料の利用・取り扱いは、暫定的指針である「名古屋大学史資料室の利用についての申し合わせ」（本ニュース創刊号参照）に基づいて行われている。この「申し合わせ」は第2回名古屋大学史資料委員会（1996年7月12日開催）で承認されたものである。同日の委員会では資料の公開の基準等の正式な取り決めを行うための予備的検討を行うために、資料室長の下にワーキング・グループ（W.G.）を設置することも承認された。

このW.G.のメンバーには、資料室長（資料委員会委員長）、資料委員会副委員長2名および資料室専任室員3名のほか、専門家として法学部および専務局からも各1名が参加することとされた。これをうけて、法学部および事務局に対して適任者の選出依頼を行った結果、同年9月下旬までに両部局からの回答を得て資料委員会の法学部委員および事務局委員（総務部長）がW.G.のメンバーとして参加することになった。

ワーキング・グループにおける審議の概要

W.G.第1回会合は1996年10月18日に開催された。冒頭に資料室長からW.G.設置の経緯や位置づけについての説明、構成員の紹介が行われた後、審議の進め方など今後のスケジュールについて審議が行われた。その結果、①W.G.の進行は資料室長が務めること、②開催頻度は月1回程度とすること、③1996年度中にW.G.としての案をまとめ、資料委員会等の議を経て1997年度秋頃の施行を目指すこと、などが決定された。なお、この審議結果は同日開催された第3回資料委員会に報告され、その了承を得た。

第2回会合は同年11月8日に開催され、これ以降、実質的な審議が行われた。この第2回以降、実質的な審議が行われた。W.G.では、資料公開の基準等を具体的に検討するのに先立ち、まず他大学等の類似施設の現状調査を行い、審議の際の参考とした。その結果、東京大学（「東京大学史史料室規則」）ならびに東北大学（「東北大学記念資料室利用規則」）の事例に倣って「名古屋大学資料室利用規則」（仮称）を制定し、その「利用規則」の中に資料公開の基準等に関する規定を盛り込むことが適切であるとの結論に至った。その後W.G.では、「利用規則」に盛り込むべき具体的内容の審議に入った。

同年12月13日に開催された第3回会合では、前回に引き続き「利用規則」に盛り込むべき具体的内容についての審議が行われた。その際、資料室設置の経緯等を勘案すれば資料公開の原則が妥当であるが、その際に個人のプライバシー保護への十分な配慮も重要であるという方向性が出された。W.G.終了後に開催された第4回資料委員会では、W.G.での審議の概要が報告されるとともに、①「名古屋大学史資料室利用規則」（仮称）を制定してその中で資料公開の基準等を規定すること、②同「利用規則」の原案作成をW.G.が行うこと、の2点が提案され、審議の結果、承認された。これによってW.G.は、設置当初に予定されていた資料公開の基準等の原案作成だけにとどまらず、新たに「名古屋大学史資料室利用規則」（仮称）全体の原案作成を委ねられることになった。

第4回会合は、1997年2月21日に開催された。この日の会合に先立ち、資料室ではそれまでのW.G.における審議内容等を踏まえて「名古屋大学史資料室利用規則（案）」を作成し、W.G.のメンバーに事前配布した。同案は、東京大学ならびに東北大学の利用規則の基本的な考え方と同一であり、所蔵・保管資料は個人の秘密保持等の理由により非公開とすべきもの以外は原則として公開するとした上で、資料の利用資格・利用日時・利用手続き等を規定している。当日は、同案をたたき台として各規定内容に対する逐条検討が加えられ、W.G.としての大詰めの審議が行われた。なお、当初、同案は「規則」として制定することが予定されていたが、その規定内容から判断して評議会等での審議を要する「規程」とするのが妥当であるとされ、これに伴って名称も「名古屋大学史資料室利用規程（案）」と改められた。

今後の予定

W.G.において一応の審議を終えた「利用規程（案）」は、今後さらに資料室で最終調整を行った後、資料委員会ならびに評議会等での審議を経ることになる。そしてそこでの承認を順調に得ることができれば、当初の予定通り、1997年秋には「名古屋大学史資料室利用規程」（仮称）が制定・施行されることになり、学内外の資料室利用者に対する閲覧・参考調査等の業務が正式に開始されることになる。

（文責：山口）

受贈図書一覧（96年4月～97年2月）

新修名古屋市史報告書2
名古屋港西地区ボーリングコア分析調査報告書
名古屋市市政資料館　4月 4日

名古屋大学文学部青桐会会員名簿
大木政一　4月 8日

大谷大学真宗総合研究所研究所報NO.33
大谷大学　4月 8日

愛知大学史紀要第3号
愛知大学　4月 8日

九州大学大学史料叢書第4輯
九州大学　4月 8日

歴史編纂事務室報告第十七集
明治大学記念館の歴史と資料　明治大学　4月12日

立命館百年史紀要第四号
立命館大学　4月12日

立命館百年史紀要別冊No.2
立命館大学　4月12日

桃山学院年史紀要第15号
桃山学院　4月15日

同志社談叢第十六号
同志社社史資料室　4月18日

高田短期大学紀要第14号
高田短期大学　4月18日

サティア≪あるがまま≫第22号
東洋大学井上円了記念学術センター　4月22日

創立者関係記録神奈川大学史資料集第十二集
神奈川大学大学資料編纂室　4月22日

聖徳学園女子短期大学紀要第二十六集
聖徳学園女子短期大学　5月30日

関西大学百年史資料編
関西大学　5月30日

明治大学記念館の歴史と資料
歴史編纂事務室報告第十七集
明治大学歴史編纂事務室　5月30日

八高のこと
山口拓史　5月30日

八高同窓生著作目録
山口拓史　5月30日

大乗の至極浄土真宗国際真宗学会第6回大会報告
大谷大学真宗総合研究所　6月12日

名古屋大学経済学部同窓会名簿
昭和45年版(開学50周年記念号)
島　昭夫　6月17日

名古屋大学経済学部同窓会名簿
昭和48･49年版
島　昭夫　6月17日

創立60周年記念号
昭和55年版名古屋大学経済学部同窓会名簿
島　昭夫　6月17日

紀要第14号
名古屋外国語大学外国語学部　7月15日

藤沢市文書館紀要19
藤沢市文書館　7月18日

サティア≪あるがまま≫第23号
東洋大学井上円了記念学術センター　7月24日

東京大学史紀要第14号
東京大学史史料室　8月26日

真宗総合研究所紀要第13号
大谷大学真宗総合研究所　9月18日

中央大学百年史編集ニュース第26号
中央大学広報部大学史編纂課　9月27日

旧制高等学校教育の成立
中村治人　10月 3日

十八会50周年記念誌大学生活（昭和15～18年）を顧みる
井上　俊　10月11日

聖徳学園女子短期大学紀要第27集
聖徳学園女子短期大学図書館　10月16日

サティア≪あるがまま≫第24号
東洋大学井上円了記念学術センター　11月 6日

梅花学園出身のタカラジェンヌ展
展示目録　梅花学園資料室　11月 8日

人文論集第31巻第1号
神戸商科大学経済研究所　12月 2日

人文論集第31巻第2号
神戸商科大学経済研究所　12月 2日

人文論集第31巻第3、4号
神戸商科大学経済研究所　12月 2日

人文論集第32巻第1号
神戸商科大学経済研究所　12月 2日

写真集愛知大学の歴史1946～1996
愛知大学50年史編纂委員会　12月 5日

新島襄の少年時代―脱国まで―
同志社社史資料室　12月 6日

武蔵野美術大学年報1990-1992年度版
武蔵野美術大学大学史史料室　12月20日

学校法人大乗淑徳学園100年史資料編
学校法人大乗淑徳学園　1月 6日

学校法人大乗淑徳学園100周年記念写真集
学校法人大乗淑徳学園　1月 6日

サティア≪あるがまま≫第25号
東洋大学井上円了記念学術センター　1月24日

『名古屋大学史紀要』原稿募集

名古屋大学史資料室が毎年刊行する『名古屋大学史紀要』は、下記要領の趣旨にかなう原稿であれば、執筆者の所属等にかかわらず、随時投稿を受け付けています。

1998年3月に刊行する第6号の執筆申し込みの締切は7月31日（木）、原稿提出の締切は10月31日（金）を予定しています。

詳細については、お気軽に大学史資料室までお問い合わせください。

名古屋大学史紀要編集要領

1　本誌は、名古屋大学史および高等教育史に関わる研究論文、研究ノート、史資料紹介等を掲載する。
2　本誌に論文等を掲載しようとする者は、所定の投稿要領に従い編集事務局に送付するものとする。なお投稿者については学内外を問わない。
3　原稿の掲載は編集委員会の審議を経て決定する。
4　掲載予定の原稿について編集委員会は、執筆者との協議を通じて内容の修正・変更を求めることがある。
5　編集事務局は、名古屋大学史資料室におく。

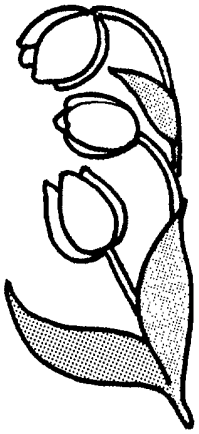
名古屋大学史紀要投稿要領

1　論文原稿は原則として未発表のものに限る。
2　投稿の内容に従って、編集委員会が原稿の分量を指定することがある。
3　原稿は英文タイトルを付けて送付するものとする。
4　原稿は、氏名、所属（職名その他を含む）、連絡先を付記し編集事務局に送付するものとする。

資料室日誌（抄）

8月1日　岐阜経済大学教員、一橋大学関係資料閲覧のため来室。
8月1日　朝日新聞社会部記者、戦時下の遺物につき照会。
8月3日　中村助手松本出張（旧制高等学校記念館所蔵資料調査、第一回夏期教育セミナー参加、4日まで）。
8月5日　朝日新聞社会部記者、『名古屋大学五十年史・通史一』につき照会。
8月9日　野村副総長、東山キャンパス計画につき史料等照会のため来室。
8月12日　朝日新聞社会部記者、戦時下の遺物につき照会のため来室。
8月15日　朝日新聞社会部記者、戦時下における名古屋帝国大学につき照会のため来室。
8月23日　福島大学行政社会学部教員、第八高等学校一覧、名古屋高等商業学校一覧閲覧のため来室。
8月29日　名大文学部教員、第八高等学校国史担当者照会のため来室。
9月2日　学外者より、第八高等学校寮歌につき照会。
9月13日　愛知県教育センター職員、椙山女学園大学教員、岡崎高等師範学校関係史料調査のため来室。
9月17日　名大施設部OB、名大に関係した軍関連施設照会のため来室。
9月20日　『名古屋大学史資料室ニュース』創刊号、学内分発送。
9月22日　中村助手東京出張（教育史学会出席、23日まで）。
9月26日　学外者より、愛知県下の師範学校につき照会。
10月4日　『名古屋大学史資料室ニュース』創刊号、学外分発送。
10月7日　神谷助手、山口助手、広島出張（広島大学大学教育研究センター所蔵資料調査、全国大学史資料協議会1996年度全国研究部会参加、9日まで）。
10月15日　医学予備校より名大五十年史および創立に関する資料等の提供の依頼。
10月18日　名古屋大学史常任資料委員会（第4回）、資料等公開の基準に関するワーキンググループ会合（第1回）、名古屋大学史資料委員会（第3回）開催。
10月22日　大分大学事務員より、名大五十年史刊行経緯につき照会。
10月25日　名大附属図書館情報管理課より、名大出版会の創設経緯および事業目的等につき照会。
10月28日　金沢大学教員より、大学史編纂体制につき照会。
10月29日　金沢大学教員より、大学史編纂経過につき照会。
10月31日　井上俊名誉教授より、医学部関係資料を受贈。
10月31日　山田鐐一名誉教授より、医学部関係資料を受贈。
10月31日　名大総務部総務課より、五十周年記念事業後援会の報告書作成につき年史編纂関係原稿作成の要請。
11月5日　加藤総長より、愛知県下の大学史につき照会。
11月8日　名大教育学部図書室より、『第八高等学校一覧第34年度』の所在および入手法につき照会のため来室。
11月8日　資料等公開の基準に関するワーキンググループ会合（第2回）開催。
11月11日　愛知大学五十年史編纂担当者より、1949年当時の名大法学部における開講科目名および担当教員名につき照会。
11月14日　南山大学五十年史編纂担当者6名、年史編纂の体制と資料整理の方法等につき照会のため来室。
11月15日　東京大学大学院学生より、旧名城キャンパスの建設空間に関する資料につき照会。
11月18日　名大経済学部所蔵名古屋高等商業学校関係史料の調査開始。
11月19日　九州大学庶務課より、名大内の学術標本保管部局につき照会。
11月19日　名大施設部施設計画推進室員、本多静六の植樹プランおよび戦後名古屋市の都市計画とキャンパス計画に関する資料照会のため来室。
11月19日　名大学務部学務課事務員、東大史関係資料閲覧のため来室。
11月21日　東京大学大学院学生、旧名城キャンパスの建設空間に関する資料閲覧のため来室。
11月25日　名大医学部教員より、『稿本名古屋大学医学部百十五年史』につき照会。
12月2日　南山大学五十年史編纂担当者より、基本資料の整理と執筆者の史料閲覧方法につき照会。
12月13日　杉田全氏より、故杉田直樹氏書簡を受贈。
12月13日　名古屋大学史常任資料委員会（第5回）、資料等公開の基準に関するワーキンググループ会合（第3回）、名古屋大学史資料委員会（第4回）開催。
12月20日　京都大学教員より、名古屋大学史資料室設置経緯および設置形態につき照会。
1月7日　加藤総長より、大幸地区の敷地面積につき照会。
1月7日　名大総務部総務課より、1977年に設けられた古川図書館転用委員会につき照会。

1月21日　名大教育学部事務員、東北大学記念資料室の目録閲覧のため来室。
1月29日　山口助手東京出張（東京大学史史料室、国立国会図書館、31日まで）。
2月4日　筑波大学広報調査課より、名古屋大学史資料室の設置目的につき照会。
2月5日　名大総務部総務課より、仮病院仮医学校の設置年月および設置場所につき照会。
2月7日　埼玉大学庶務課より、年史編纂における資料と執筆の体制につき照会。
2月13日　名大医学部関係資料に関する懇談会。
2月13日　山田鐐一名誉教授より、医学部関係資料を受贈。
2月13日　井上俊名誉教授より、医学部関係資料を受贈。
2月14日　名大教育学部教員、『名古屋高等商業学校一覧』につき照会のため来室。
2月17日　南山大学五十年史編纂担当者、年史編纂における資料と執筆の体制につき照会のため来室。
2月18日　名大総務部総務課より、『名古屋大学五十年史・通史二』の典拠資料につき照会。
2月21日　資料等公開の基準に関するワーキンググループ会合（第4回）開催。
2月21日　元名大教員より、愛知医学校につき照会。
2月26日　中村助手東京出張（国立国会図書館、外務省外交史資料館、28日まで）。
2月27日　名大教育学部事務員、『東北大学記念資料室所蔵学校一覧』閲覧のため来室。



名古屋大学史資料委員会議題（第1回～第4回）

第1回（1996年4月12日開催）
（1）名古屋大学史資料室専任室員（助手）の選考について
（2）副委員長について
（3）常任委員会の設置について
（4）平成8年度事業計画について

第2回（1996年7月12日開催）
（1）資料公開の基準について
（2）部局資料の調査・収集等について
（3）公文書類の利用のあり方について
（4）資料の保存・活用スペースについて
（5）その他

第3回（1996年10月18日開催）
（1）「資料公開の基準」について
（2）資料の受入れについて
（3）部局資料の調査・収集等について
（4）その他

第4回（1996年12月13日開催）
（1）「資料公開の基準」について
（2）平成10年度概算要求について
（3）欠員流用の継続願いについて
（4）その他

Nagoya University Archives

Nagoya University Archives(NUA) was founded in April 1996, as a inside measure in Nagoya University. NUA has its origins in the Office of the Compilation of the History of Nagoya University established in April 1985, which edited "Fifty Years History of Nagoya University". The publication was planned as one of commemorative works for 50th anniversary of Nagoya University.

NUA collects and archives all kinds of historical materials on Nagoya University. Its purpose is not only the collecting of the above materials, but the research on the history of Nagoya University, moreover that of higher education. NUA's holdings are institutional records, University or other publications, oral history collections, drawings, photographs, memorabilia collections, manuscripts, faculty papers and so on. NUA provides information and records created by, for, and about the University to faculty, staff, students, and the public for research.

The office consists of several teaching staffs of School of Education and School of Letters.

名古屋大学史資料室

室　　長　篠　田　　弘（教授・併任）

専任室員　神　谷　　智（助手）

中　村　治　人（助手）

山　口　拓　史（助手）

事 務 員　増　田　よしみ

題字　加藤延夫総長

名古屋大学史資料室ニュース　第2号

Nagoya University Archives News No.2

発行日　1997年3月25日（年2回刊）

編集
発行　名古屋大学史資料室

名古屋市千種区不老町〒464-01

電話(052)789-2046～2048

印　刷　株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田2-16-38